くからである。思えば吉益氏について今日研究されねばならない主題は多岐にわたる。二十一世紀の新しい漢方医学を考える出発点として、まず本書を手がかりに吉益東洞氏の『古書醫言』から読み解いてみたらいかがであろうか。

（秋葉　哲生）

〔汲古書院、東京都千代田区飯田橋二―五―四　正吾ビル二階、電話〇三―三二六五―九七六四、二〇〇四年一月、A五判、三三三頁、定価一二、〇〇〇円〕

山崎　光夫　著

『ドンネルの男　北里柴三郎』

北里の生涯が克明に書かれた本書の表題に「ドンネルの男」と象徴的に加えられているが、時に雷が落ちるような雷親爺の意味でつけられていると同時に稲妻の様にきらめく北里博士の思考力と実践力も意味していると解釈すれば、ドンネルの男がより一段と巨人に相応しい生涯を象徴するように思われる。

筆者は三年前に中村桂子著「北里柴三郎」（本誌四七巻一号）を紹介しているが、今回は本書上下二巻（五八七頁）の紹介をすることになり、北里博士がどのように書かれているかを述べる。

先ず何といっても山崎氏の三十冊を超える著書の中でも最も長編となっており、日本細菌学会誌の今年四月号（北里柴三郎博士生誕一五〇周年記念特別企画講演を所載）の裏表紙全面に東洋経済新報社が北里博士の写真も添えて著者渾身の長編小説と紹介している。学会誌に記念号とは言え出版広告は極めて珍しい。出版社の自信と意気込みが窺われる。

山崎氏は北里博士には多年関心を持ち続けて来られたようで、二十年来の構想の後に書かれたと著者の話を北里博士の孫の北里一郎氏が紹介されている（日医ニュース一〇一五号）。一昨年出版されたある随筆風の小編の中で、恐らく三十歳ごろから医師それも大学・病院・開業医と各科の臨床医、基礎医学者と広く会って来たと述べている事からも、多年の著作には医療・医学、薬学、民間薬としかもそれらを取り巻く社会の動きなど並々ならぬ幅広い範囲の内容からも今回の著作の素地は十分に出来上がりつつあったようで北里博士の生誕一五〇周年を期して多年の構想をまとめられたものと考えられる。しかも北里博士についての取材は極めて徹底したものであることは文面からも充分窺えるのである。

例えば小生にとって感心した点は、明治二十七年（一八九四年）に英国領香港のペスト流行についてその前後の経緯と政府の対応など詳しく書かれており北里博士がペストの調査に出張するのである。現地でコッホ研究所での学識経験によりペスト菌を同定し発見を公表するのであるがその項で細菌のグラム染色についての記述がその発見に始まり手技は勿論その技術上の問題点にまで詳細に述べている事である。

著者は以前一九九一年の著作の後書きで小説を書く事は三一致（さんいつち）の世界に挑戦する事と書いている。これは時間、場所、人物の三つの条件が一致するよう設定するとの事でこの考えで著者は書いて来たのであろうが本書も北里博士が全編を通じていろいろな場面で終始極めてリアルに人間性が感じられる様に書かれている事に作家としての努力と力量が頷かれる。医療、医学についての当時の専門的な状況も織り交ぜながら次々と場面を展開させる所はこれまでの山崎氏の著作に比べると資料の取材が豊富にされているようで、内容の臨場感にいっそう読者を引き付けるのである。

このような作風の全編の極く一部を列記してみると東大医学部卒業の頃から始まり結婚の事、北里の活躍していた明治の初期の衛生行政の推移も劇的に述べられ、本邦最初の細菌学の論文発表《緒方正規・北里柴三郎共著による鶏コレラ菌の同定》の事、ドイツ留学に至るまでの経緯、留学中のコッホ研究所でのコッホやレフレル、ベーリング等研究仲間との交流、留学期間の延長、破傷風菌の純粋培養成功までの苦労、コッホのツベルクリン療法、帰朝の事、帰朝後の伝染病研究所設立の事、香港にペスト調査に出かけペスト菌の発見、明治三十二年（一八九九）横浜検疫所でのペスト菌発見と野口英世の事、志賀潔の赤痢菌発見の事、コッホの来日、伝研の文部省移管問題、北里研究所の設立、日本医師会長就任のこと等その他の詳細な展開を読む事が出来る。

著者が事実として劇的な場面を書いている事は、医史学上ではかって疑問視されていた北里博士とパストゥールの面談であるがドイツよりの帰路パリで二人が会っている事について藤野恒三郎博士は不明と書いている。（藤野・日本細菌医学史一三七頁）北里研究所北里柴三郎記念室の近年の調査によると北里の日記及びパストゥールから署名入りの写真が残っているところから二人は会っている事は間違いないとのご教示を戴いている。

ここで一箇所について説明を補い理解を助ける事にしたい。上巻二一五頁にある「破傷風菌の純粋培養と平行して気腫疽菌（鳴疽菌）と呼ばれる細菌の研究を続けていた」とあるが、科学史的にも医科学史的にもこの文には説明が必要である。つまり嫌気度の高い気腫疽菌の非常に困難な純粋培養を一八八九年に液体培地で一八九〇年には固形培地で成功したのであった。気腫疽菌の嫌気性純粋培養実験の前駆的な研究が破傷風菌の純粋培養の研究を成功に導いたと考えられそれ故に比較的短い期間に成功したと見られるのである。この事についても北里柴三郎記念室より資料についてご教示を戴いている。

本書は「週刊東洋経済」に二〇〇二年四月より連載されたもので、医師が読んでも参考になる所が多く興味深く書かれている。

（会田　恵）

〔東洋経済新報社、東京都中央区日本橋本石町一―二―一、電

話〇三―三二四六―五五五一、四六判、上巻二七三頁、下巻三一五頁、上下とも一七八五円〕

片桐　一男　著

『平成蘭学事始　江戸・長崎の日蘭交流史話』

鎖国の間も日本はオランダを長崎に限って入港させ、一般と隔離した出島の蘭館を唯一の拠所として交流がおこなわれてきた。

片桐一男氏は対外交渉史における通詞の存在に注目し、当時専門書のなかったこの職業団を研究して『阿蘭陀通詞の研究』（吉川弘文館）を世に出した。内外の資料から実証的に解明把握し鎖国下の日本に海外情報と世界知識を取り入れた通詞たちの業績を示した。

本書は著者が青山学院大学定年を前に、二十八年にわたる研究を通してその間に発表した新聞や雑誌記事などをまとめたものである。第一章では阿蘭陀通詞という役人の足跡を追い、江戸文化を守り育てる上に貢献した業績を具体的に紹介している。

第二章は日蘭交流の舞台となった出島を蛮館の図入りで説明し、江戸町の通詞会所と通詞部屋の位置を示す。

第三章では来日したケンペル（KAEMPFER）、ツュンベリー（THUNBERG）、シーボルト（SIEBOLD）が、出島で独自の調査を実行した状況を追っている。この三人の旺盛な知識欲、意欲的な活動、また彼らと交った日本人の姿を、深い理解力で活写し、ノートを破りとったメモの走り書き一つも見逃すことなく紹介して感動を伝える。

五章六章以下八章までアヘン戦争を伝えた情報や砂糖・カステラ・オランダ料理、蘭学者の生き方と影響など史料に則しながら、こと細かに描いて飽きさせない。

著者は『杉田玄白』（吉川弘文館）や『蘭学、その江戸と北陸』（思文閣出版）『阿蘭陀通詞今村源右衛門英生』（丸善）『蘭学事始とその時代』（日本放送出版協会）『開かれた鎖国―長崎出島の人物・情報』（講談社）『阿蘭陀宿海老屋の研究』（思文閣出版）など多くの研究書でオランダとの交流を書き続け、また早くに（昭和四十七年）鎖国時代『対外応接関係史料』（近藤出版社）を校訂して、長崎入津の唐和蘭陀船に関する史料を詳細に紹介し、応接関係職や帳簿書類名また外国船名・人名などを教えてくれた。

本書はそうした長年の道すじで論文に書かなかったエピソードを日蘭交流の副産物とし提供したものといえよう。時には社会の裏側に批判の目を向けたり、暗夜に手探りで外国語を学んで鎖国下の日本に唯一ヨーロッパの実情を伝えた通詞たちの苦労を知らせようと願った著者の人情がにじみ出ている。話術の巧みな著者は、一般の人々にもわかりやすく、また研究者への史料紹介として鎖国時代の興味ある史話を時には対話形式で或いは独自の形で披露してみせる。珍らしい絵図や写真を惜しみなく用いて、この時代やオランダに関心の